

SJF技術の変遷

2000年（平成12年）

JF研究会設立

関節機能障害（joint dysfunction）の治療（症候の原因である関節機能障害の治療法確立）

2001年（平成13年）

仙腸関節治療技術に潤滑理論を取り入れ、腸骨の操作を主とした技術に変更

関節潤滑機構を運動科学の中に位置づけし、関節内運動力学(arthrokinetics)とした。

膝の関節内運動（track）に基づいた治療法を開発

肋骨の関節（肋横突関節）に対する治療法を開発

関節の接近技術を slack から close に変更

2002年（平成14年）

むちうち症患者の頸部回旋制限がC1/2椎間関節機能障害由来のものと判明

（動きが大きい関節にも関節機能障害が多い → 腰仙関節の治療技術を開発）

仙腸関節からの脱却。比較研究の結果、腰仙関節の治療に変更

2003年（平成15年）

拘縮（contracture）の治療として接近延長法（close lengthening）を開発

2004年（平成16年）

理学療法雑誌に「関節拘縮に対するSJFの効果」投稿

2005年（平成17年）

筋の収縮活性化の技術として速い逆構成滑り法（quick inverse sliding）を開発

同時に拮抗筋の不活性化の技術として速い構成滑り法（quick direct sliding）を開発

JFの名称をSJFに変更

2006年（平成18年）

治療後の即効性より治療的検査法確立（有痛性疾患の確定診断が治療的診断法）

2007年（平成19年）

L5/S1治療法 au, pd を ds, us に変更（3D-CT像により運動の中心点が椎体側に存在）

筋再教育の技術として自動介助運動を伴う介助構成滑り法を開発

筋力増強の技術として抵抗運動を伴う対向構成滑り法（Counter sliding）を開発

SJF治療技術の名称を統合整理、変更

2008年（平成20年）

従来の神経筋再教育を運動（器）再教育（神経筋関節再教育）に修正することを提唱

シュプリンガー・ジャパンより「SJF関節ファシリテーション」第1版出

2009年（平成21年）

主動作筋と同時に拮抗筋を活性化する速い逆構成半滑り法

（alternating quick inverse semi-sliding : A-quick）

（bilateral quick inverse semi-sliding : B-quick）を開発

動作促進法を開発（SJF効果を動作の自立に向けた訓練法として利用）

2010年（平成22年）

呼吸障害に対して第11肋骨関節に対する q.i.s. で横隔膜（吸気）の活性化技術を開発
その他肋骨の関節に対する治療法を開発
q.i.s. による関節受容器への刺激が脳に達する実験

2011年（平成23年）

L5/S1治療にasymmetrical downward sliding (ads) 技術を開発

2012年（平成24年）

筋線維タイプ別治療的運動技術を開発（type II × に対する刺激法）
臨床におけるSJF技術の使用手順を確定

2013年（平成25年）

個別筋線維の収縮活性化技術を開発
丸善出版社より「SJF関節ファシリテーション」改訂第2版出版
シュプリングージャパンより「4 D-CTで解き明かす 関節内運動学」編集出版

2014年（平成26年）

腰仙関節治療に自動介助法を使用（効果を確認）

2015年（平成27年）

運動科学の分類表を改定

2016年（平成28年）

コースノートの英文訳完成

2017年（平成29年）

ぎっくり腰の治療効果確認 （200例超）
機能障害に対するPTOTの優位性について決定

2018年（平成30年）

東京学会にてSJF技術と外国（アメリカ、カナダ、ネパール、オーストラリア）との比較

2019年（平成31年、令和1年）

腰仙関節治療に6方向治療法を開発

2020年（令和2年）

（コロナ発症） 予防接種後の肩の痛みがSJF治療後に消失することを確認

2021年（令和3年）

SJFで拡大するPTOT の職域について静岡学会で発表

2022年（令和4年）

BiotribologyのSJF技術への導入を九州学会で発表

2023年（令和5年）

腰仙関節治療の適応症の増大についてまとめ、NDNの関与を理論としてSJFに導入

2024年（令和6年）

肩、膝の関節ROM障害に対するIMD関節の治療順序についてまとめ

2025年（令和7年）

痛みの発現の仕方による神経伝導方式とSJF治療後の予後に関する表完成

2026年（令和8年）

脊柱起立筋のスパズム消失治療として肋骨頭関節の前後の滑り法開発